2023年度名古屋造形大学

映像文学領域 総合型選抜・専願　課題文

＜物語の文章＞

作品名：おやゆび姫　LITTLE TINY OR THUMBELINA

著者名：ハンス・クリスチャン・アンデルセン　Hans Christian Andersen

訳：大久保ゆう

　やがて、おやゆび姫は野ネズミの家の玄関（げんかん）を見つけました。きりかぶの下にある、小さな穴ぐらが野ネズミの家でした。ぽかぽかして、ゆったりとした穴ぐらに野ネズミは住んでいました。穴ぐらには、麦がいっぱいつまっている部屋と、台所、それときれいな食事部屋がありました。おやゆび姫はやっとのことでたどり着いたドアの前に立ちました。立って、ものごいの少女のように、「麦を一つぶだけでいいですからくださいませんか。」と頼みました。なぜなら二日間食べ物を一つも口にしていなかったからです。

　野ネズミは穴から顔を出し、おやゆび姫を見ると、「こりゃあ、ふびんなむすめさんじゃ。」と言いました。この野ネズミは人のいいおばあさんネズミでした。「さぁ、ぬくとい部屋にお上がりよ。ごはんをいっしょに食べましょう。」

　野ネズミはおやゆび姫がとつぜん来たにもかかわらず、とても喜びました。そして、こう言いました。「よかったら、この冬が終わるまでここにいなさいな。大歓迎よ。その間、ただわたしの部屋をきれいにせいりせいとんして、おそうじしてくれるだけでいいんじゃよ。あと、お話をわたしに聞かせてくれんかね。わたしは人の話を聞くのが大好きなんじゃ。」おやゆび姫はおん返しのつもりで、野ネズミからたのまれたことは何でもこなしました。そしておやゆび姫は、楽しい毎日を送っていったのです。

　ある日、野ネズミは、「近いうちにお客さまがいらっしゃるよ。」と言いました。「ご近所さんがね、週一回ここをたずねてくるんじゃよ。その人、わたしよりお金持ちでね。大きな部屋がいくつもあってね、つやがあってきれいな黒いコートを着ているんじゃよ。お前さんにあの人みたいなおむこさんがいれば、きっと何不自由なく暮らせることでしょうねぇ。でも、あの人、目が見えないから、お前さんの知っているとびきりのお話を一つ二つしてやんなさい。」

　とはいっても、おやゆび姫はご近所さんに気なんてありませんでした。というのも、その人はモグラだったからです。でもやっぱり、モグラはつやつやのコートをめかしこんでやってきました。野ネズミの説明では、モグラは大金持ちでそれに物知りで、家は野ネズミの家の二十倍もあるそうです。

　モグラがお金持ちで物知りなのはまちがいありません。ですけれども、口を開けば、太陽はばかばかしいだの、花なんてかわいくないだの。一度も見たことがないから、モグラはそう言うのです。おやゆび姫はモグラのたのみで歌をうたいました。「てんとう虫、てんとう虫、家までひとっ飛び。」とか、他にもかわいい歌をいっぱいうたいました。モグラはおやゆび姫にいっぺんに好きになってしまいました。その甘い歌声にやられてしまったのです。でも、モグラはそのことをだまっていました。しんちょうなのです。

つい最近、モグラは野ネズミの家とモグラの家をつなぐ通路をほって作っていました。そこでモグラは言いました。
「おやゆび姫、この通路、好きなときにいつでも通ってよろしい。ただし、通路に鳥の死がいが転がっている。見ても、怖がらないでくれたまえ。」
くちばしも羽根もちゃんとついた鳥が、通路に本当に転がっていました。死んでからそう経っていないようでした。
モグラは口にくさった木をくわえました。木はまっくらやみの中で火みたいにぴかぴか光ります。まっくらの通路の先を明るくするため、モグラは二人の前に進み出ました。死んだ鳥が横たわっている地点に来たとき、モグラは頭の上の土を鼻で押して、大きな穴を作りました。お日さまの光が通路の中に差しこんできます。道の真ん中にツバメが倒れていました。足と頭をかくすように美しいつばさをわきに引き寄せています。かわいそうに、ツバメはこごえ死んでしまったようでした。おやゆび姫は小さな鳥を見て、悲しさと愛らしさがあふれてきました。このツバメは夏の間ずっと歌い続けて、おやゆび姫のためにすてきにさえずっていたのです。しかしモグラは足でツバメをわきに押しやって、言いました。「もうこいつは一言も歌わないだろうよ。この小鳥、なんてみじめなつきの下にお生まれになったんだろうね！　ぼくの子どもが鳥でなくて本当によかったよ。あいつらは鳴くことしかのうがないんだからね。『キーヴィ、キーヴィ』ってさ。そのあげく、冬にははらぺこでおなくなりになってしまうんだ。」
「まぁ、お前さんうまいことをおっしゃるわい。さすがかしこいモグラさまじゃ！」と、野ネズミは大きな声を出して言いました。「さえずったりしても、いったい何になるというのかねぇ。どうせ冬になればはらぺこか、寒さで死んでしまうというのに。いくら育ちがよくてもねぇ。」
おやゆび姫は何も言いませんでした。でも、二人がツバメに背を向けて引き返していった後、そのまま残ってしゃがみました。頭におおいかぶさっているやわらかい羽をそっとのけて、閉じられたまぶたにキスをしました。「もしかして、あなたは夏の間わたしに歌ってくれた鳥さんじゃありませんか？」と、言いました。「わたしをとっても楽しませてくれた、大切ないとしい鳥さん。」
モグラは立ちどまって、お日さまの光が入ってくる穴をふさぎました。そして野ネズミの家まで二人を送りました。その夜、おやゆび姫はねむれませんでした。おやゆび姫はベッドから下りて、大きくきれいに干し草の毛布（もうふ）をあみました。おやゆび姫は毛布を死んだ鳥のところへ運びました。ツバメの上におおい広げて、野ネズミの部屋からみつくろった花をいくつかそばに添えました。毛布はふわふわで、ツバメが冷たい地面で寒くならないようにわきの下にもしきました。
「さようなら、かわいい小鳥さん。」と、おやゆび姫は言いました。「さようなら。夏の間、木がみんな緑づいたときも、あつい日ざしが照っていたときも、楽しく歌ってくれてありがとう。」
おやゆび姫は頭をツバメの胸の上にぴっとりと寄せました。そのとき、ツバメの身体の中から、何かへんな音が聞こえて、いっしゅん不安になりました。
「ドクン、ドクン。」
ツバメの心臓（しんぞう）の音だったのです。本当は死んでなどいなかったのです。寒さのために死んだようになっていただけで、ぬくもりが命を吹き返させたのです。秋になると、ツバメはみんなあたたかい南の方へ旅立っていきます。でも、もし何かのひょうしで一羽がぐずぐずしていて、冬になってしまったらどうでしょう。寒さ

でカチンコチンに凍ってしまって、あたかも死んだようになってしまって、地面に落ちていきます。その上から冷たい雪がおおい隠してしまって……

おやゆび姫はこわくてふるえました。たったおやゆびくらいのおやゆび姫に比べて、ツバメはくらべものにならないほど大きかったのです。おやゆび姫は勇気をふりしぼって、ぶあつくふわふわの毛布をかわいそうなツバメの上にかけました。それから自分がベッドカバーとして使っているペパーミントの葉を取って来て、ツバメの頭にかぶせました。

よく朝、おやゆび姫はツバメを見ようともう一度こっそり抜け出しました。ツバメは生きていましたが、とても弱っていました。おやゆび姫を見ようと、しばらく目を開けるのがやっとです。ツバメの目の中には、くさった木片を手の中ににぎりしめているおやゆび姫がいます。手下げランプがなかったので、青く光る木を持ってきたのです。

「ありがとう、かわいいおじょうさん。」と、病気のツバメは言いました。「ちょうどいいあたたかさだったよ。すぐに力がみなぎってきた。もういちどあたたかい日ざしのなかで飛べるよ。」

「まぁ、外は今も寒いわ。吹雪(ふぶき)よ。このままあたたかいベッドの中にいてください。わたしがあなたをお世話しますから。」と、おやゆび姫は言いました。

それからおやゆび姫は花びらに水を入れて、ツバメのところへ持っていきました。ツバメは水を飲むと、話を始めました。

「ぼくのつばさの片方はトゲで傷ついているんだ。だから、みんなのように早く飛ぶことが出来なくなった。みんなみたいにあたたかい南の国へ旅立てないんだよ。それからついに地面に落ちて、それから後はおぼえていないんだ。どうやって君が見つけてくれた場所に来てしまったかも。」

冬の間ずっとツバメは通路の中にとどまっていました。おやゆび姫はせいいっぱい世話をするうちに、ツバメが好きになってしまいました。しかし、モグラも野ネズミもこのことは何も知りません。というのも、二人はツバメが気にくわなかったから、気づきもしなかったのです。

あっという間に春がやってきて、お日さまが地面をぽかぽかさせました。ツバメはおやゆび姫にお別れのあいさつをしました。おやゆび姫はモグラが前に作った天井の穴を開けました。お日さまは二人の頭上にさんさんと照っていました。

ツバメはおやゆび姫に、「ぼくといっしょに行きませんか？」と聞きました。「君の大きさなら、ぼくの背中に乗れますよ。ぼくといっしょに、遠くの『緑の森』へ行きましょう。」

でも、おやゆび姫は行ってしまって野ネズミを一人きりにすれば、とっても悲しむにちがいない、とわかっていました。だからおやゆび姫はこう言いました。「ごめんなさい、遠りょしておきます。」

「ごきげんよう、そしてさようなら。君はほんとに優しくかわいいおじょうさんだ。」と、ツバメは言いました。そして太陽の光の中へ旅立っていきました。

ツバメを見送るおやゆび姫の目には、なみだが浮かんでいました。おやゆび姫はあのかわいそうなツバメが大好きだったのです。

「キーヴィ、キーヴィ。」と、ツバメは歌いながら、『緑の森』へ向かって飛び立っていきました。

おやゆび姫はとても悲しみました。あたたかいお日さまの下に出ることは、許されませんでした。畑(はたけ)にまかれたたね麦は、空に向かって高く伸びていき、ついには野ネズミの家の屋根を越えました。親指くらいの背しかないおやゆび姫には、大きく深い森でした。

「おやゆび姫、お前さん結婚するんじゃよ。」と、野ネズミは言いました。「おとなりさんがね、お前さんが必要なんじゃって。なんて運がいいんじゃろね、何もないお前さんが、一日で大金持ちになるんじゃから。今ね、お前さんのウェディングドレスを用意しているんじゃ。それに毛糸と、リンネルのたんものを作らんとね。モグラの花よめになる前に、必要な物はみんな用意するんじゃよ。」

おやゆび姫は糸車を回して、糸をつむがなければなりませんでした。野ネズミは働き者のクモを四ひきやとって、昼夜をとわず布をおらせました。毎晩モグラはおやゆび姫をたずねてきました。夏も終わりにさしかかると、しきりに日取りのことを口に出しました。もうそのときに、モグラはおやゆび姫と結婚式をあげると心に決めていたのです。

「今年の夏は、日ざしが燃えるように強いんだ。そのせいで地面が石みたいにカチコチになっている。けれども、夏が終わって、地面がカチコチでなくなったら、わたしたちで結婚式を挙げるのですよ。」

しかし、おやゆび姫はちっとも嬉しくありません。というのも、あのやっかいなモグラが好きでなかったからです。

毎朝お日さまがのぼるころ、毎晩お日さまがしずむころ、おやゆび姫は戸口からそっと外へぬけ出します。すると、いつも風が吹いて、麦穂（むぎほ）がばさっと横にたおれて、そのすきまから青空が見えるのです。

『外の世界って、とってもきれいで、なんて晴れ晴れしているんでしょう。』と、おやゆび姫は思いました。

『大好きなツバメさんにもういちど会いたいのです』

おやゆび姫は強く願いました。でも、ツバメは二度と帰ってきません。すてきな『緑の森』へ飛んでいってしまったのですから。

（一部抜粋）

翻訳の底本：English Translation by H.B.Paull (1835) "Little Tiny or Thumbelina"

翻訳者：大久保ゆう

2014 年 3 月 24 日青空文庫作成